経済セミナー　書評
北村行伸
平成 18 年 8 月号

「ヤバい経済学－悪ガキ教授が世の裏側を探検する－」

スティーヴン・レビット、スティーヴン．J．ダフナー（著）望月 衛（訳）
東洋経済新報社　2006年5月11日刊

経済学には大問題と小問題がある。大問題とは、「資本主義の本質とはなにか」「なぜ貨幣は誕生したのか」「所得分配の不平等はどこまで認められるか」「なぜデフレに陥るのか、どうすればそこから脱出できるのか」など、マクロ経済全体に大きな影響を与えるようなものである。大問題はどういう状況が望ましいかという点に関する答えは直観的には分かっているが、その解決方法はなかなかわからないことが多い。それに対して、小問題とは、本書で扱われているようなもの、すなわち、「銃とプール、危ないのはどちらか」、「相撲の力士は八百長をしているか」、「先生はインチキをしていないか」、「ヤクの売人がママと住んでいるのはなぜか」、「出会い系サイトの自己紹介はウソか」など、ミクロ的な問題である。小問題については答えもわかっていないし、解決方法も全くわからないことがほとんどである。

経済学の研究テーマとしてはどちらも面白いが、これまでは大問題を研究することが経済学者の使命であるかのような風潮があったが、レビット教授は一貫して面白い小問題を見つけては、どうやって答えを見つけ出すかを実証的に示す機知に富んだ論文を書いてきた。レビット教授のアプローチは基本的には個人の行動をそのインセンティブから説明しようとするものであり、経済のみならず人間の社会的行動の源泉を暴き、それを実証的に確認するというものである。その際、経済学の教科書では教えてくれない様々な制度に関する理解が重要な鍵となっている。実証方法としてはミクロ計量経済学の一つの分野であるプログラム評価あるいは自然実験を含む政策評価の手法を用いることが多い。ここではいかに面白いミクロ統計データから、純粋なインセンティブを抽出できるかということに注意が払われている。

レビット教授が取り上げる問題は、社会経済問題、とりわけ経済学者がこれまであまり触れたがらなかった、地下経済、人種差別、人工中絶と犯罪の関係など極めて論争的なものである。本書でも触れられているが、保守・革新両派から厳しい批判を受けることもたびたびある。しかし、レビット教授は特定の立場から発言をするのではなく、あくまでもデータに結論を語らせる立場を貫くことによって、社会的に難しい問題に果敢に挑戦し続けている。

ところで、レビット教授は提起した問題に完璧な答えを与えていると言えるだろうか。多くの経済学者が、レビット教授達のアプローチに魅了され、後続研究を続けているのは、レビット教授らの制度の理解が不十分であったり、統計処理が不完全であったりして、様々な側面で改善の余地があるからである。たしかに、完璧な論文が出てしまうと、それを超える論文は簡単には書けない

が、レビット教授の論文にはいくらでも突っ込める余地が残されているように思う。それが、彼の研究が注目を浴び、また、彼の様な論文を書きたいと多くの若手研究者や大学院生が面白い小問題探しに躍起になっている理由でもあろう。

本書の共著者であるダフナー氏はジャーナリストでレビット教授の精緻な実証研究を一般読者に読みやすく書き下しており、経済学を知らなくても、十分楽しめるように書かれている。今、経済学の本でベストセラーに入ろうと思えば、これぐらいクールに書かないといけないという見本のような本である。いろんな意味で、経済学の新しい息吹を感じさせてくれる一冊である。